



### 矢島 渚男 選

円空仏ほつこり御座す冬の宿

桐生市 中村 正人

【評】宿に思いがけなく、円空があった。各地を歩いて至る所を仏を彫った人だから、有りつる「ほつこり」がとても良い。  
寒梅やつほみ小き蕪村の忌

堺市 原山 桂子

【評】蕪村の命日は古い歳時記には旧暦で十二月二十五日とされているが、今日の一月十七日にあたる。歳末では蕪村最後の秀句と季節感が合わない。改めたいものだ。この句は実情で詠んでいて納得する。  
寒鯉の沈み動かぬ力かな

国分寺市 野々村 澄夫

【評】動かないことにも力が要るということに発見がある。動くよりも難しいことかも知れない。  
北陸へ向う医師団深雪晴

都留市 野中 定代

水餅や生きる力は噛む力

さいたま市 関根 道豊

息白く吐いてまあるく眼鏡拭く

泉佐野市 布野 寿

寒鯉の居場所無きまで固まれの

神奈川県 石黒 雅風

無言館出て兜太の碑に吹雪さけり

土浦市 高井 昭

夜寒し守衛へ返す重き鍵

岡山市 西尾 照常

冬ぬくし古代ローマ展ゆつくりと

鹿島市 平山 ちほる

### 高野ムツオ 選

焼け跡の夫婦茶碗や能登に雪

東村山市 副島 健

【評】輪島市朝市通り。その焼け跡の瓦礫から見つけた夫婦茶碗。二人は無事だろうか。またも能登は雪に包まれる。カメラアイがシャープ。粕汁や被災の画面前にして

榎原市 田原 真知

【評】粕汁は二十日正月、残っていた鮭や鯛で食べる。海藻入りは能登名物。被災者の悲しみをテレビ画面越しながら目にして食べる味の何とも言えない複雑さ。  
向かひ合ふだけの幸せ日向ぼこ

山形市 栗原 だだし

【評】向かい合っている相手はもちろんだ太陽。少し顔を上げ、目を瞑って、しばし陶然の境地。愛の日差しをたつぷりと心ゆくまで味わう。  
焼失の瓦礫の町へ人へ雪

習志野市 只木 実

みちのくの芯の寒さや白湯を飲む

西東京市 永井 康信

寒肥を撒き終えて見る青い空

上尾市 富塚 トシ子

取説を炬燵に引っうたた寝す

湖南市 滝井 正之

目覚めれば頬まで雪来少年期

青梅市 松野 英昌

炊出しに手袋ぬぎし小きな手

佐野市 山口 裕子

深々と力たくはぶ冬田かな

匝瑳市 椎名 貴寿

### 正木ゆう子 選

偶然の積み重なつてこの落葉

松江市 早坂 哲夫

【評】落葉が散り敷く自然さは、よく見ると実に見事。人が同じように撒こうとしても出来るものではない。木にあった葉の位置、風の吹き具合、高低差、時差。すべて偶然。出張の父とスマホに福は内

神戸市 西 和代

【評】通話かメールで繋がりがつ「鬼は外、福は内」と豆を打つ。伝統行事に電子機器が溶け込んだ令和の今。相手が父である事も微笑ましい。母に嘘ついて出かける初詣

茨西市 星野 芳美

【評】友達と行くこと嘘をついて、デートする。あるいは初詣に行くと言つて、何か悪い事をする。親がいて、親に嘘をつくくらいが、人生の華。能登へ降る容赦なく降る雪悲し

福山市 平井 和子

蒸し米の砂を争う寒造

滝沢市 小田 佐枝子

別格と言ふべき雪の伊吹山

宝塚市 広田 祝世

四歳と二歳の音や枯葉道

横浜市 瀬古 修治

寒い朝金星だけがわが救い

新座市 洞口 英夫

寒禽の揺する小枝を見逃さず

国分寺市 加藤 武夫

漆黒の空の真珠や寒満月

長岡京市 みつきみすず

### 小澤 實 選

自転車です手まで行って蓬摘み

東京都 山口 たかよ

【評】家のまわりには蓬は生えていない。自転車を出して来て、少し離れた川の土手まで出かけて、蓬を摘んでいる。自転車で遠出するだけで、気が晴れるところがある。缶コーヒー片手に二本寒見舞

日立市 菊池 三三夫

【評】大きな手が小さ目の缶コーヒー二本あたためたものをつかんで来て、その内のひとつを渡してくれる。うれしい寒見舞である。暖かやフラダンス好きおばあちゃん

広島県 水野 英明

【評】フラダンスは高齢者の愛好者も多いのだろう。あたたかくなる。彼女は笑顔で踊ります。ますますの長寿が約束されているようだ。彩雲のかかる遠富士冬日澄る

埼玉県 西村 房男

深雪晴友は刺青消す決意

村上市 鈴木 正芳

子供らのケンケンのパと春来る

東京都 長嶋 佐渡

編み込みはテイルノザウルス春セータ

倉敷市 中路 修平

牙返る湯垢をすくふ金盥

福山市 松崎 映子

小手打ちと面打ち同時寒稽古

八代市 貝田 ひでを

寒明けやびんと立ちたる山羊の耳

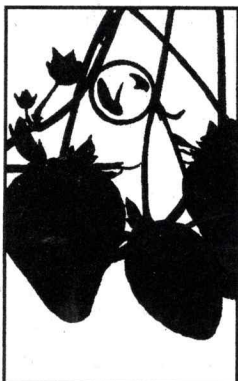
東京都 岩崎 美範

### ときめき永久に②

### 俳句あれこれ 池田澄子 (俳人)

越年まではよかったのだ。息子家族が泊まりに来ていて、二階で孫娘は宿題の書初めをするつもり。私はお茶菓子の用意に一階へ。おかーさん、大変なことになってるわよと娘が降りてきてテレビを点けた。金沢や能登半島が揺れていた。それ以後、おめでどうの言葉が私の中で封印されてしまった。俳句を詠む気が以後全く湧かない。

阪神淡路大震災のあの日、神戸から友人が遊びに来てくれてウチに泊まっていた。テレビを見て驚きながら、以後、帰宅方法を考え続け、恐る恐る帰った。差入れの洗つてありし蒔蘿草、稲畑汀子Vその平成七年、芦屋にお住みの汀子は「う詠んでいらした。洗つてありし」に私はときめいた。その気付き、それ故の感謝を言葉によってこの世に残して下さったことで読者にも、洗つて下さっていた人の細やかな思いやりが胸にすんと落ちた。言葉によって永久に漂つ善意と感謝。



題字デザイン・イラスト

福田美蘭